

ヤマトタケルとオホクニヌシ

神 田 典 城

記紀の伝えるヤマトタケルの物語は、古代英雄の典型として、殊に、「古事記」の記述の文芸性とも相俟って、長く、日本人に愛されてきた。

このヤマトタケルの物語については、従来、日本神話（『記紀神話』）に登場するスサノヲとの類似が説かれてゐる。しかし、類似の要素という点を見れば、スサノヲもさる事ながら、オホクニヌシの一連の神話に、より多くの類似が認められる。

無論、二、三の点について論じられた例はあるが、管見に入つた限りでは、いずれも断片的であつて、全体を通じて比較したものは無かつた。しかし、卑見によれば、ヤマトタケルとオホクニヌシの間には、細部に互つて共通の要素を見出す事ができる。そこで以下、本稿に於て、

両者の共通要素を指摘して、研究者諸氏の注意を促したいと思う。

なお、「古事記」と「日本書紀」は、異なる原理によつて編纂されており、それは、ヤマトタケルとオホクニヌシの扱いの上にも表われている。従つて、両者の「像（イメージ）」を比較する場合には、記紀それぞれの内部に限る事が必要な手続きとなるが、「話素」として取り上げる場合には、支障が無い限り、記紀を同列に扱つて差支え無いものとする。

(1) 従来の指摘

はじめに、既に指摘されている点を二、三簡単に掲げておこう。

泉谷康夫氏の「服属伝承の研究」の中に、ヤマトタケルの東国遠征の話と、「古事記」の、オホクニヌシとスセリビメの結婚物語が、意外とよく似ている、との指摘がある。

すなわち、ヤマトタケルが駿河国で焼き殺されようとした話と、オホクニヌシが、スサノヲのために野焼きに会ったのとは、ほぼ同じである。また、ヤマトタケルがヲトタチバナヒメの入水によって相模湾の暴風から逃れたのは、女性の助けによってまぬがれた点で、オホクニヌシがスセリビメの助けで、スサノヲに課せられた難を逃れたのと同じく、さらに、両者共に、その後で、目指す女性（ヤマトタケル↓ミヤズヒメ・オホクニヌシ↓スセリビメ）と結婚した点で一致する、と説いている。

一方、青木紀元氏は、「日本神話の基礎的研究」の中で、播磨国のアシハラシコヲ（記紀に於て、オホクニヌシの亦名として見える）に言及されて、アシハラシコヲという名称は、アシハラ（日本）の勇猛なる男性の意である。そして、エゾやクマソを征服した倭の国（日本）の勇者（タケル）の観念が、記紀のヤマトタケル命という伝説上の一人物を結晶させたのに似て、アシハラシコヲも、観念的な説話上の神である、との趣旨の論を構成されている。

(2) 類似点の指摘

では、筆者の見出した、ヤマトタケルとオホクニヌシの類似点を、列挙して行こう。

(イ) あざむかれて、野火に囲まれる。

これは、(1)で示されている例だが、ヤマトタケルは、相武国の国造（「日本書紀」では駿河に居る賊）に欺かれて、野火に囲まれる。

一方、オホクニヌシは、根国で、スサノヲに、やはり欺かれて野火に囲まれる。

(ロ) 近しい女性から与えられた呪物によって難局を解決する。

これも、一つは(1)に示されているように、ヤマトタケルは、野火で囲まれた時、姨のヤマトヒメから与えられた、火打（燧）と草薙剣（「日本書紀」では、与えられたのは剣のみ）によって危難を逃れており、オホクニヌシの場合は、妻のスセリビメに与えられた比礼によって、蛇室・呉公と蜂の室の危難から逃れた。

筆者は、この項について、いま一つの点を挙げたい。

すなわち、オホクニヌシの蛇室・呉公と蜂の室は、自分の始祖でもあり、同時に父親でもあるスサノヲ（この点は後に触れる）から課された「難題」であり、「父（もしくは、それに近い存在）によって課せられた難題を、

新しい存在の女性から与えられた呪物によって、解決した。」と捉えることができる。

そこで、ヤマトタケルを見ると、西征の折、熊曾を討つにあたって、ヤマトヒメから給わった御衣御裳で女装して、見事に討ち果たす。

この、熊曾討伐は、父天皇景行によって課せられた「難題」であり、また、姨のヤマトヒメは、伊勢大御神に仕える神聖な女性であって、その女性の与える御衣御裳は、単なる衣服では無い。ヤマトタケルの身を守るべき、呪的な霊物と考えられる。

従って、ヤマトタケルの熊曾征討は、「父によって課せられた難題を、新しい女性から与えられた呪物によって解決した」ものであって、右に見た、オホクニヌシの、蛇・呉公と蜂の室の話と類似の要素と考えられる。

い 大小のペアの片割れとしての名を持つ。

これは、近年、盛んに唱えられている、日本神話に見出される印欧三機能体系の問題に於て、第三機能に属する双生児神の例としての、指摘がなされている。が、今は三機能体系云々は置いて、ともかく、ヤマトタケルもオホクニヌシも、共に、大小のペアの片割れである点を示しておく。

ヤマトタケルは、本来の名を小碓命と言い、兄の大碓

命と対をなしている。さらに、「日本書紀」には、大碓と小碓が双生児として出生したことが記されており、「大碓・小碓」の名が、ペアになっていることは明らかである。

オホクニヌシは、四通りの亦名（「日本書紀」では六通り）を持っており、そのうち、オホナムチの名で登場するときは、記紀風土記を通じて、多く、スクナヒコ（ナ）と行動を共にしている。

神名に関する詳しい論述は、本稿では避けるが、この両神は、名前・行動から見て、「大・小」のペアを形成していると見ることが出来る。

もちろん、ヤマトタケルとオホクニヌシでは、「大」と「小」の関係が逆になっている点に問題を残すが、ともかく、「大・小」の対をなす名を持つ存在の、片割れであることは間違いない。

(二) 大人数の兄弟。

ヤマトタケルが景行天皇の御子であることは言うまでもないが、「古事記」によれば、この天皇には、名を録す者、録さないもの併せて、八十人の御子があり、「日本書紀」にも、「夫れ天皇の男女、前後并せて八十の子まします」と記されている。すなわち、ヤマトタケルには、同腹異腹合計で八十名にもなる多勢の兄弟があっ

たことになる。

オホクニヌシの方も、「古事記」に、「兄弟、八十神坐しき」とあって、これまた、大人数の兄弟があったとされている。

もちろん、「八十」というのは、数が多いことの表現であるが、記紀を通じて、「八十」の数で示されるほど多くの「兄弟」を持ったとされる存在は、ヤマトタケルとオホクニヌシのみである。

(ホ) 肉親に疎まれた結果苦労する。

この項目は、ヤマトタケルとササノヲの共通点として、既に指摘されている事柄だが、これは、オホクニヌシについても、同様の事が言える。

一応、ヤマトタケルに関して見ておくと、「古事記」によれば、父天皇から、その性質の荒々しさを嫌われて、西征に、東征にと追い立てられる。殊に、東征に赴く時のヤマトタケルの言葉に、その様子が窺われる。

オホクニヌシはどうかと言うと、ヤカミヒメへの求婚争いに敗れた兄弟たち（八十神）は、オホクニヌシを嫉妬して迫害する。その結果、オホクニヌシは、二度も死ぬ目に会い、一時、根国へ逃れることを余儀なくされる。つまり、ヤマトタケルは、父に疎まれて、辛苦し、ついには死に至り、オホクニヌシは、兄弟に憎まれて、死

ぬ目に会っている。

ただし、ヤマトタケルの西征については、(ロ)で指摘した要素もあって、ここには、二つの要素が重なっていると考えられる。

(ハ) 十分な資格を持ちながら、王位（主権）と縁が薄い。

両者ともに、全国的な規模の征服を成し遂げながら、最終的には、主権者として君臨することができない。

ヤマトタケルは、太子の一人（景行天皇の太子は、三人ある）であり、自らの力で、西に東に賊を討ち平らげておりながら、遂に皇位に即くことなく、この世を去る。オホクニヌシは、葦原中国の事実上の統合者でありながら、その統治権は、最終的に、天神に渡すことになる。

このオホクニヌシの葦原中国支配の問題は、日本神話解明の、重要なテーマとして、様々に論ぜられているところだが、少なくとも、記紀の「表面上の記述」に限定して見る限りでは、オホクニヌシの一連の神話は、右に述べたごとき構造になっていると言える。

すなわち、ヤマトタケルもオホクニヌシも、国土の実際的な征服に成功しながら、最終的には、本人の望まない出来事（一方は死・一方は、強力な他者からの要求）の結果、主権と縁を断たれるのである。

(ト) 主権者に対する忠誠心を失わない。

これも、(ホ)の項目と同様に、ヤマトタケルとスサノヲの類似として挙げられており、その詳細は省くが、オホクニヌシも、葦原中国の統治権を譲るに当たって、新たな「主権者」としての高天原に対して、忠誠を誓っている。

(チ) 父に準じる存在が、同じエピソードを持つ。

ヤマトタケルを含む、景行天皇の系譜は、造作の跡が濃いとされているが、その系譜の中で、ヤマトタケルの父景行の兄弟である、ホムチワケは、出雲大神の崇りによって、八拳鬚が、胸先に至るまで物を話さなかったという。しかも、「日本書紀」によれば、「猶泣つること児の如」き有様であった。

このエピソードは、スサノヲと酷似したものとして有名である。

ところで、このスサノヲは、「古事記」では、オホクニヌシの六代前だが、その娘のスセリビメをオホクニヌシが娶っているのだから、父親でもある（「日本書紀」でも、一書の一、二でそれぞれ五世、六世の孫だが、本文では、子となっている）。

従って、ヤマトタケル、オホクニヌシ共に、父に近い存在が、同様のエピソードを持っていると言ってよい。

(リ) 名称の類似。

最後に、最も大きな類似点として、名称をとり上げよう。

ヤマトタケルは、本来、ヲウスという、個有の名を持っている。それが、ヤマトヲグナとも呼ばれ、さらに、最終的には、ヤマトタケル（ヤマトの勇者）という、観念的な名を得る。

それに対して、オホクニヌシも、いくつかの神格を総合した、極めて抽象的・観念的な神名と考えられる。

すなわち、神話の中で、実際の活動が語られるとき、オホクニヌシの名で呼ばれることは無く、多く、オホナムチであり、また、アシハラシコヲであり、その他、亦名が列挙されてもいる。

それぞれの神名の詮索は、別の機会に譲るとして、ともかく、ヤマトタケル・オホクニヌシが、共に、一般名詞的な（或は、総合的な）名称であることを、まず確認しておく。

さらに、この名称は、その与えられ方に共通性を持っている。

ヤマトタケルの名は、敵対者であるクマソを、巧みに欺いて討ち果たしたとき、当の相手であるクマソタケルから賛辞と共に贈られたものである。

一方、オホクニヌシの方は、根国に於て、難題を課された相手である、スサノヲによって、そのスサノヲを見事に出しぬいて根国を去るに当たって、やはり、賛辞と共に贈られている。

これを見ると、両者共に、敵対者（オホクニヌシにとつては、次々と難題を課され、遂には、欺いて逃げ出すべき相手である）から贈られているのである。しかも、それは、知恵・勇気というものを示した結果として、その示した相手から与えられているという点でも、共通している。

なお、本稿では詳述する余裕が無いが、名称については、次のような問題も存することを示しておきたい。

右に、ヤマトタケルは、別に、ヲウス・ヤマトヲグナの名を持つと書いたが、ヤマトヲグナも、一般名詞的な色彩を帯びている。

一方、オホクニヌシは、この名を得るきっかけとなる、根国訪問譚では、はじめオホナムチであったのが、根国へ行くと、スサノヲは、アシハラシコヲの名を言い、根国を去るに当たって、オホクニヌシの名を与えられる。

これらを見ると、ヤマトタケルには、「ヲウス↓ヤマトヲグナ↓ヤマトタケル」、オホクニヌシは、「オホナムチ↓アシハラシコヲ↓オホクニヌシ」の図式が仮定さ

れ、そこに、説話上の、両者の人格・神格の形成パターンの共通性を見出すことも、可能になると思われる。

(3) むすび

以上、九つの項目を挙げて見てきたが、この他、両者共、歌と深い関わりを持っており、また、呪的な刀を手に入れる、といった共通点も考えられる。

このように、ヤマトタケルとオホクニヌシには、とても偶然とは思えない一致が見られ、従来の、ヤマトタケルとスサノヲの類似、といった論に、ヤマトタケルとオホクニヌシの類似を分析する作業も、付け加えられるべきであると考ええる。

記紀全体の構成から考えても、景行↓ヤマトタケルの系譜は、従来、天皇系譜上、多くの問題があるとき、二つの王朝をつなぐ位置にある可能性も言われている。そして、スサノヲ↓オホクニヌシの系譜は、高天原と出雲をつなぐ役割も持っており、こういった事を考える上でも、ヤマトタケルとオホクニヌシの共通性の問題は、重要度が高いと思われる。